

令和6年度

第46回例会 『基礎研究と応用研究のリエゾンで人類の未来を考える』

開催日時: 令和6年12月17日(火)17:00～18:00

開催場所: 大学院講堂

講師: 高橋 伸一郎 先生(東京大学大学院 農学生命科学研究科)
宮本 崇史 先生(筑波大学 医学医療系 内分泌代謝・糖尿病内科)

講演内容: **講演1:** 人類の活動が引き起こした異常気象、生物多様性の喪失、そしてパンデミックなど、人類の生存を脅かす地球上の課題が日々積み重なっています。『食』の生産は、地球に大きな負荷をかけていることを広く知られていますが、これを止めるわけにはいきません。これから「人類」という生物は、地球上でどのように生きていったら良いのか、私たちが提案している『次世代栄養学』を中心に、この難しい問いを一緒に考えてみませんか。
講演2: 医療の高度化と病態の複雑化に伴い、医学・工学・情報学の融合的アプローチが不可欠となっています。本講演では、これら異分野の技術を統合することで実現した、1細胞オミクスやラベルフリーイメージング、デジタルステイン、生体分子デバイスなど、細胞レベルでのマルチモーダルな情報を可視化・操作する革新的技術を紹介しします。さらに、このような学際的な基礎研究が次世代医療の創出に果たす重要な役割について考察を深めます。

主催教室: 医学部(平形明人教授)

第45回例会 「Indices of Peripheral and Cerebral Vascular Health and Neurocognitive Function in Non-Hispanic Black Individuals」

開催日時: 令和6年12月12日(木)17:30

開催場所: 医学部講義棟A 6階 604講義室

講師: Dr. Robert Matthew Brothers, Professor, The University of Texas at Arlington

講演内容: 米国において健康格差の影響は、人口全体にわたる健康的な生活の質に対する重大な障壁として認識されるようになってきています。過去14年以上にわたり、ブラザーズ博士の研究室は、他の人種と比較して心血管、代謝、脳血管疾患のリスクが高い非ヒスパニック系黒人における健康格差のメカニズムの調査に主に焦点を当ててきました。最近では、ブラザーズ博士は黒人女性に焦点を当てた研究で多くの成果をあげています。黒人における心血管病増加のメカニズムに関する研究は以前にもありましたが、黒人女性でも疾患リスク／有病率が同様に高いにもかかわらず、これまでの研究は主に男性を対象に行われてきており、黒人女性を対象にした研究の医学生理学的、社会的意義は高いと言えます。
彼の最新の研究では、黒人女性における健康の社会的決定要因と末梢／脳血管機能障害との関連性を調査しております。これまでの研究では、社会的要因は、疾病リスクの上昇に寄与していることが分かっていたにもかかわらず、疾病リスクの統合的な生理学的メカニズムを解明するための体系的な研究調査には組み込まれていないことが多く、彼の研究は重要な新しい知見をもたらすと考えられます。この講演では、この重要な研究分野における主要な調査結果と今後の方向性を示します。
日本においても在留外国人は増加していることから、人種間の病態生理の違いを理解することは臨床的に求められるようになってきており、その点からも、この講演では重要な知見を得られるものと考えます。

主催教室: 医学部総合医療学 松田剛明教授

令和5年度

第44回例会 「Sympathetic neurocirculatory regulation in human health and hypertension」

開催日時: 令和5年11月27日(月)17:30

開催場所: 医学部講義棟A 6階 604講義室

講師: Dr. James Fisher(Associate Professor,University of Auckland)

講演内容: 交感神経活動の亢進は、高血圧、心不全、Ⅱ型糖尿病など、いくつかの慢性心血管疾患および代謝疾患の臨床的特徴として知られています。更に、交感神経活動の亢進はこれらの疾患や、心臓や血管のリモデリング、不整脈などの関連疾患の病態進行をもたらす可能性も指摘されています。高血圧動物モデルでは、中枢および末梢の化学反射感受性の上昇によって交感神経活動の活性化が引き起こされることが確認されています。講演者は、人間の健康と高血圧における中枢および末梢の化学反射活性化に対する交感神経循環反応に関して、多くの研究成果を上げております。今回、骨格筋血管系に対する血管収縮に関与する交感神経性活動の直接神経内記録を使用した一連のトランスレーショナル研究における知見を講演者の研究成果を含めてご講演いただきます。

主催教室: 杏林大学保健学部リハビリテーション学科理学療法学専攻(跡見友章教授)

第43回例会 「ER型救急を専門にすること」

開催日時: 令和5年10月12日(木)11:00～12:00

開催場所: 大学院講堂

講 師:	船越 拓 先生(東京ベイ・浦安市川医療センター 救命救急センター長)
講演内容:	東京ベイ・浦安市川医療センター 救命救急センターのセンター長である船越拓先生をお迎えして「ER型救急を専門にすること」というタイトルで、ER型救急における現場の実態や必要とされる知識・技術等についてご講演いただきます。 講演の主な対象者は、杏林大学医学部附属病院での1.2次救急を担っている専攻医及び初期研修医に向けた内容です。 1.2次救急を目指す先生だけでなく、他診療科の先生方にとっても、長年にわたって救命救急の現場に携わってこられた先生の経験豊富なお話を伺う貴重な機会になると思います。
主催教室:	杏林大学医学部総合医療学(松田剛明教授/長谷川浩教授)
第42回例会	「1. 第一回 成人先天性心疾患 周術期管理セミナー「Fontan循環を学ぼう！」
開催日時:	令和5年8月25日(金)
開催場所:	ZOOMを用いたweb開催
講 師:	平田 康隆 先生(東京大学 医学部 外科学専攻心臓外科 准教授) 松井 彦郎 先生(東京大学医学部 生殖発達加齢医学専攻発達生物学 准教授)
講演内容:	先天性心疾患患者に対する小児期の手術成績が向上し、近年、成人した先天性心疾患術後の患者が増加してきている。それに伴い成人の先天性心疾患術後患者が悪性腫瘍の手術や外傷などの非心臓手術を受ける機会が飛躍的に増加してきている。先天性心疾患術後の患者は、施行された術式にもよるが、その体内循環が正常解剖とは異なっている事が多く、また肺高血圧症や不整脈などを合併している症例もいるため、周術期においてより集学的な管理が必要となる。 そこで本セミナーでは、単心室に対する根治的術式であるフォンタン手術をテーマにして、フォンタン手術術後患者の周術期管理を学ぶため、①フォンタン手術患者の疫学、②フォンタン手術の術式、そして③術後管理について、各領域の専門家を講師として招き講演していただく。 参加者は、麻酔科、心臓血管外科、循環器内科を中心に、消化器外科、呼吸器外科などの外科系医師、そして、集中治療室、手術室の看護師、臨床工学技士など、周術期医療に携わる医療従事者を広く対象としたセミナーである。 今後、杏林大学附属病院としても成人先天性心疾患患者に対する手術医療を行うことが予想される為、本学に勤務する多くのスタッフにとって有意義な講演となることが期待される。
主催教室:	杏林大学医学部附属病院手術部、細井 温(心臓血管外科教授 手術部長)
第41回例会	「Eureka! Lessons learned by a physician scientist from the NIH」
開催日時:	令和5年5月19日(金)17:30～
開催場所:	大学院講堂
講 師:	Samuel T. Hwang 教授 University of California, Davis 校
講演内容:	Hwang先生は皮膚免疫を専門とする physician scientist であり、特に、悪性リンパ腫、メラノーマを主とする皮膚悪性腫瘍における免疫応答や尋常性乾癬など炎症性皮膚疾患におけるケモカインとリンパ球のトラフィッキングに関して多くの重要な知見をトップジャーナルに報告されています。また、先生はかつて米国 NIH の National Cancer Institute 皮膚科でラボチーフをされており、同時期、同じ部門に皮膚科学教室教授 大山 学 先生が在籍していました。また先生は、眼科学教室 教授 岡田アナベルあやめ 先生 の Harvard Medical School の同級でもあります。先生はこれまで多くの日本人留学生を指導されていることなどから UC Davis と杏林大学の連携につながるイベントにしたいと考えております。免疫学のご研究のみならず、診療科を越えて幅広く基礎・および臨床のお話をさせていただきますので多くの方のご参加 をお待ちしております。
主催教室:	医学部教員・職員能力開発室、皮膚科学教室、眼科学教室
令和4年度	
第40回例会	「糖尿病における運動時の循環応答－TRPV1チャンネルに着目して－」
開催日時:	令和4年9月26日(月)17:30～19:00
開催場所:	医学部講義棟A 6階604講義室
講 師:	石澤里枝 先生 Ph.D., Assistant Instructor, University of Texas Southwestern Medical Center

講演内容:	糖尿病の予防ならびに治療戦略として運動療法が有効であることはよく知られている。しかしながら、糖尿病患者においては身体運動に対する過剰な血圧応答の増大が観察される(Holwerda et al. Am J Physiol Heart Circ Physiol, 2016)。この余剰な血圧増加は心血管系イベントリスクを高めることから、安全な運動処方確立のためには糖尿病における循環調節異常の要因を明らかにすることが重要である。しかしながら、そのメカニズムは明らかとされていない。本セミナーでは除脳・無麻酔ラットによる運動昇圧反射テスト(in vivo)および神経-骨格筋標本を用いたシングルユニット神経活動記録(in vitro)から得られた知見を紹介しながら、糖尿病における過剰な循環応答に対する新規標的因子TRPV1チャネルの可能性について議論したい。
主催教室:	医学部総合医療学 松田剛明教授
平成31年度・令和1年度	
第39回例会 開催日時: 開催場所: 講 師:	「サイエンスと志-日本で語られない臓器移植のこれから-」 令和2年2月14日(金)17:30~18:30 医学部臨床講堂 河合達郎 教授 ハーバード大学医学部教授、マサチューセッツ総合病院移植外科 河合達郎先生は1981年に日本大学医学部をご卒業後、東京女子医科大学腎臓外科で腎移植の臨床に従事され、さらに1991年からの3年間は、移植免疫の研究のためにマサチューセッツ総合病院(MGH)移植外科にご留学されました。その後先生は東京女子医大に一旦戻られましたが、移植免疫の研究への思いを断ちがたく同大学を退職し40歳で再渡米されました。大変なご苦労の末、先生は改めてアメリカ医師免許を取得されMGHの臨床スタッフとなり、2008年にN Engl J Med誌に世界初の臨床での腎移植の免疫寛容誘導の成功を報告されました。その後先生は次々と新しい免疫寛容誘導法を開発され、現在、腎移植領域の第一人者として世界中の注目を集めています。本講演では、日本での教職を辞してまで再渡米し臨床と研究に邁進してきた先生の臨床家としてのサイエンスへの熱い志と最先端の免疫寛容誘導治療についてお話を頂きます。 医学部小児科学教室(楊 國昌教授)
第38回例会 開催日時: 開催場所: 講 師:	「非侵襲的脳刺激法 最新の進歩」 令和1年11月21日(木)16:00~17:00 基礎研究棟3F 会議室 John C Rothwell教授 Physiology and Pathophysiology of Human Motor Control, Queen Square Institute of Neurology, London Rothwell先生は磁気刺激法の世界的な権威で、ヒトを中心とした神経生理学の領域で数々の先駆的な研究を行ってこられました。1985年に開発された磁気刺激法はヒトの脳を頭蓋の外から非侵襲的に刺激できる方法で、現在では中枢運動路の機能検査、うつ病の治療など臨床的にも広く応用されるようになっていきました。今回はRothwell先生の数々のご研究の中でも、磁気刺激を含めた非侵襲的脳刺激法の最新の知見についてお話しただく予定です。ご講演は磁気刺激法のみならず、ヒトの脳の神経生理学的メカニズムに関心のある先生方にも興味をもっていただける内容になると思います。基礎・臨床を含め多くの方のご参加をお待ちしております。 医学部病態生理学教室
第37回例会 開催日時: 開催場所: 講 師:	「視覚誘導性運動錯覚は運動機能再建に寄与するか?—身体意識に影響するVRリハビリテーションシステムの臨床応用から—」 令和1年8月1日(木)17:00~18:00 基礎研究棟3階 会議室 金子 文成 特任准教授 慶応義塾大学 医学部 リハビリテーション医学教室 近年我々は、仮想現実(VR)技術の中でも、特に拡張現実技術を用いることで、単なる視覚入力ではなく身体意識に影響を及ぼす方法をシステム化しリハビリテーションに応用している。動画内の仮想的な身体像と被験者の現実の身体位置が被験者の視線で矛盾しないように調整することで、動画内の仮想身体に所有感を誘導する。仮想的に、さらにその身体が運動する映像を視覚入力することで、あたかも現実の自己身体が運動しているような錯覚(視覚誘導性自己運動錯覚, kinesthetic illusion induced by visual stimulation: KINVIS)が誘起される。これまでに、経頭蓋磁気刺激(TMS)による生理学的研究、機能的磁気共鳴画像法(fMRI)による脳イメージング研究、脳波信号からKINVISを検出するバイオマーカーに関する研究、脳可塑性に関する研究など、生理学的影響を多面的に示してきた。さらに最近実施している症例集積研究で良好な結果が得られているため、その情報を供覧する。 医学部統合生理学教室(大木 紫教授)

平成30年度

第36回例会 「Gender Matters: Blood Pressure Regulation in Women」

開催日時: 平成31年3月25日(月)17:00～18:00

開催場所: 基礎研究棟3F 会議室

講師: Qi Fu,MD,PhD 教授
Associate Professor of Internal Medicine, University of Texas Southwestern Medical Center Director, Women's Heart Health Laboratory, Institute for Exercise and Environmental Medicine Texas Health Presbyterian Hospital Dallas

講演内容: Fu先生は循環生理学分野研究の第一人者であり、数多くの論文を一流英文誌(Circulation, JACC等)に発表しております。循環調節機能の性差に関する研究で多くの先駆的な研究を行っており、今回はFu先生自身の研究成果を含めて、最近の知見について講演していただきます。若い女性に起立性低血圧が多い原因や中高齢女性の高血圧症の生理学的メカニズムなど臨床と密接に関係する内容もあり、研究者だけでなく臨床医にも興味深い内容でありますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

主催教室: 医学部総合医療学教室

第35回例会 「Sigma 1 receptor and chronic pain」

開催日時: 平成30年11月29日(木)18:00～19:30

開催場所: 基礎研究棟3F 会議室

講師: Dr. Jay Yang
Professor of Anesthesiology, University of Wisconsin SMPH

講演内容: 今回は、神経因性疼痛研究の世界的な権威であるDr.Jay Yangを招聘して神経因性疼痛発生のメカニズムから治療標的となりうる遺伝子や発現蛋白に関して御講演いただきます。特に、近年、慢性痛の関連蛋白質として注目されている“Sigma 1 receptor”を標的としたウィルスベクターを用いた治療など、最新の研究成果に話してお話いただく予定です。疼痛治療にご興味のある先生方はもちろん、molecular scienceが専門の先生方にとっても有益な講演となると思いますので是非ご参加ください。なお、講演は英語での講演ですが、Jay Yang先生は日本語も上手ですので、質疑応答や講演後のディスカッションは日本語で可能です。

主催教室: 医学部麻酔科学教室

第34回例会 「O-GlcNAc modification of protein: roles in neurodegenerative diseases and diabetes」

開催日時: 平成30年11月27日(火)17:00～18:00

開催場所: 基礎研究棟3階 会議室

講師: Gerald W. Hart 教授
Dep. Biol. Chem., Johns Hopkins Univ. Sch. Med, 米国生化学・分子生物学会 会長

講演内容: 糖鎖科学の発展に大きく貢献した国内外の糖鎖科学研究者として2018年の第二回山川民夫賞がジョーンズ・ホプキンス大のGerald W.Hart博士に授与されます。博士は細胞質でのタンパク質の糖(GlcNAc)修飾を発見し、新しい研究分野を創出しました。授賞式および博士による受賞講演が、第16回糖鎖科学コンソーシアムシンポジウム(2018年11月26-27日、本郷)で行われます。この機会に本学において博士にタンパク質への糖(GlcNAc)修飾がアルツハイマー病などの神経変性疾患や糖尿病にどのように関与しているかについてご講演いただきます。

主催教室: 医学部解剖学教室顕微解剖学部門(秋本 義弘 教授)

平成29年度

第33回例会 「不便の心地よさ～途上国小児医療の関わりから～」

開催日時: 平成29年11月30日(木)17:00～18:00

開催場所: 基礎研究棟3F 会議室

講師: 赤尾 和美 氏
ー2017年度 第45回医療功労賞(海外部門)受賞ー
特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN 代表

講演内容:	赤尾和美氏は、長年に渡りカンボジアやラオスなど保健システムが脆弱な地域で新たな医療の形作りに取り組んできた。カンボジアではアンコール小児病院の開院の際(1999年)に診療スタッフの教育・技術指導者として携わり、ラオスでは政府と交渉してラオ・フレンズ小児病院の開設(2015年)を実現させた。両国において栄養失調やエイズ感染者の訪問看護プログラムを開始し、現地スタッフの人材育成をしながら訪問看護を続けている。赤尾氏は「長年途上国での医療活動に関わり、異文化の中から『異医療』の存在を実感する」という。現地スタッフを教える立場である外国人として現地に根付くものを伝えるにはどうしたら良いのか？人として必要なことは何か？途上国でのこれまでのご経験に加え、実際の症例も取り上げながらご講演戴く。 主催教室: 医学部感染症学講座寄生虫学部門 共催: 杏林大学男女共同参画推進室
第32回例会 開催日時: 平成29年12月7日(木)17:00～18:00 開催場所: 第2病棟2F 会議室A 講師: 清水 章 氏 日本医科大学 解析人体病理学教室 教授 講演内容: 主催教室: 小児科学教室(楊 國昌教授)	「腎病理の基礎と臨床」 近年、腎病理の臨床においても、純形態学的観察に加えて、病変部内における多くの病原性惹起分子、病態バイオマーカー、そして治療標的分子の同定の試みが活発になってきました。演者は、本邦の腎病理の基礎と臨床の指導的研究者として、長い間活躍されています。今回、腎病理の見方の基本、病理所見から疾患の病態を考えるスキルなどについて、統合的に概説して頂きます。学生を含む多くの方々のご参加を期待しております。
第31回例会 開催日時: 平成29年11月13日(月)17:00～18:00 開催場所: 基礎研究棟3階 会議室 講師: 丹治 保典 氏 東京工業大学大学院 生命理工系 教授 講演内容: 主催教室: 救急医学教室(松田剛明教授) 感染症学教室(神谷 茂教授)	「バクテリオファージ研究の現状～基礎研究から医学への応用の可能性～」 高度医療による易感染宿主の増加に伴い、抗菌薬耐性遺伝子の拡大と耐性菌のまん延は制御できていません。今後も続く抗菌薬開発と耐性菌出現のサイクルに、抗菌薬以外の治療法の開発が求められています。バクテリオファージが細菌に感染し、増殖すると宿主である細菌を溶菌することから、細菌感染症の治療へのバクテリオファージの応用は東ヨーロッパを中心に古くから検討されてきました。本講演会ではバクテリオファージ研究の我が国の第一人者である丹治保典教授にこれまでの研究成果をご紹介いただきながら、バクテリオファージ研究の基礎から医学への応用の可能性についてご講演いただきます。
第30回例会 開催日時: 平成29年10月10日(火)17:00～18:00 開催場所: 臨床棟 会議室B 講師: Stig Tryggve Linder教授 カロリンスカがんセンター(腫瘍病理学分野)	「Proteasome deubiquitinases as novel targets in oncology」

講演内容:	ユビキチン(Ub)–プロテオソーム(PSM)系(UPS)は、タンパク質に付加されたUb鎖をPSMが認識し標的タンパク質を分解するシステムです。タンパク質の新陳代謝の他にDNA修復、細胞内物質の移動など様々な生物学的プロセスを調整する経路です。UPSはがん細胞でも機能的に働くことからその分子標的としてPSM阻害剤が注目されています。多発性骨髄腫、マントル細胞リンパ腫の治療薬であるbortezomibは、PSMを阻害し不要なタンパク質の分解が阻害されることからアポトーシスが誘導され細胞死に至ります。Linder先生の教室ではUPSにおける脱Ub酵素に関する新たなPSM阻害剤の開発に取り組んで来られました。今回の来日を機にUPSを標的としたがん治療についてご講演いただきますので、がん関連の臨床医・研究者・大学院生の皆様にはどうぞ奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。
主催教室:	乳腺外科学教室(井本 滋教授)
第29回例会	「動脈スティフネス・加齢・習慣的身体活動」
開催日時:	平成29年9月7日(木) 11:00～
開催場所:	外来棟10階 第2会議室
講 師:	菅原 順 氏 国立研究開発法人産業技術総合研究所 人間情報研究部門 主任研究員
講演内容:	動脈系は生体の循環を担う重要な器官であるが、部位によってその役割は異なる。大動脈や頸動脈などの中心動脈は高い伸展性を有し、心臓からの断続的な血液駆出に対し動脈壁が伸展して血圧の上昇を緩和するクッションやダンパーのような役割や、伸展した動脈壁が元に戻ることで動脈内に貯留した血液を末梢へと送る補助ポンプの作用を有する。これらの機能は、収縮期血圧の過剰な増大を緩和し、左室後負荷を低減する。また、拡張期血圧の過剰な低下を抑え、冠状動脈血流を維持する。さらに、血流や血圧の拍動性変動を抑制し、脳や腎臓のような脆弱な末梢臓器をメカニカルストレスから守る。しかし、これらの作用は、加齢に伴う中心動脈壁の硬化度(スティフネス)の増大により損なわれ、心血管系疾患の発症やそれによる死亡率、全死亡の有用な予測因子となる。一方で、身体活動や食事など、生活習慣を改善することで、高齢者の増大した動脈スティフネスを改善し得るという報告が、これまで多数報告されている。今回は、我々の研究グループの先行研究を中心に、動脈スティフネスにおける加齢の変化、および習慣的身体活動に伴う適応について概説する。
主催教室:	総合医療学教室
第28回例会	「Small Molecule Modulators of Histone Acetyltransferases: Implications in Disease Biology.」
開催日時:	平成29年9月7日(木) 11:00～
開催場所:	基礎棟3階 会議室
講 師:	Tapas K. Kundu, Professor Molecular Biology & Genetics Unit, Jawaharal Nehru Centre for Advanced Scientific Research (JNCASR), Bangalore, India.
講演内容:	Eukaryotic genome is organized into a highly dynamic nucleoprotein structure referred to as chromatin. The fundamental unit of chromatin is a nucleosome, comprising of around 200 base pairs of DNA and four different core histones. The epigenetic modification of DNA and core histones fine-tune the genome function, thereby serving as a fundamental regulator of cellular homeostasis, in physiological as well as pathophysiological conditions. Reversible acetylation of histone and non-histone protein is one of the most well studied epigenetic modifications in the context of disease. Targeting the enzymatic system involve in this process has proved to be a promising therapeutic approach, since a few small molecules have already been approved as drugs. We have discovered several small molecule inhibitors of histone acetyltransferases and in an experimental system have established their therapeutic potential in treating cancer and AIDS. Our laboratory has discovered the first know small molecule, specific activator of the acetyltransferase KAT3 family (p300/CBP). We have shown that this activator can induce neurogenesis in the mouse brain and thereby enhance the formation of long term memory. Recently these molecules have also been shown to effectively revert the memory in ‘Alzheimer’s’ mouse model. The effectiveness of this class of molecules is currently being studied in the process of neurogenesis and depression.
主催教室:	細胞生理学教室(寺尾 安生教授)

第27回例会 「見えない壁だって、越えられる。」

開催日時: 平成29年5月24日(水) 18:30～

開催場所: 杏林大学医学部付属病院外来棟10階 第1会議室

講師: 小林幸一郎 氏
(NPO法人モンキーマジック代表)

講演内容: 視力障害者あるいは失明者が生活行動範囲を拡大し自立を促すことは、医療行為として大切である。視覚障害者のロービジョンケアの一環としてボルダリングの利用を全国的に勧めてきて、その有用性が注目されている。その現状を報告いただく。

主催教室: 眼科学教室(平形 明人教授)

平成28年度

第26回例会 「暑熱環境下における交感神経調節:加齢と循環系疾患の影響」

開催日時: 平成29年3月23日(木) 11:00～12:00

開催場所: 外来棟10階 第2会議室

講師: 小河 繁彦 氏
(東洋大学理工学部生体医工学科教授)

講演内容: 自律神経活動は、循環調節において重要な要因である。起立ストレスや運動など、体循環変化や代謝の変化、また脳機能に依存して変化する。一方、圧受容器反射など様々な生理機能によりその機能は修飾される。本講演では、ヒトの交感神経活動の同定法から、交感神経活動を修飾する生理機能について詳しく解説する。特に、暑熱環境下における自律神経活動の役割について焦点をあて先行研究などの結果などを示し、問題点について考察する。また、若年健常人だけでなく、加齢や循環系疾患により、暑熱環境下における自律神経活動がどの様に影響を受けるのかについても概説する。

主催教室: 総合医療学教室(松田 剛明教授)

第25回例会 「Gタンパク質共役受容体 (GPCR)と疾患～新しい調節機構への示唆～」

開催日時: 平成29年3月22日(水) 18:30～19:30

開催場所: 基礎棟2F 病理学演習室

講師: 槇田 紀子 氏、飯利 太郎 氏
東京大学医学部附属病院 腎臓・内分泌内科

講演内容: Gタンパク質シグナル伝達系は進化上非常によく保存されたシステムですが、一方で進化の過程でシグナルの多様性を獲得してきました。脱オーファン化も進みGPCR研究の成熟期にある現在、シグナルの特異的制御を可能とするbiased agonismという概念が注目されています。本講演では、まれな内分泌疾患をたたき台として、疾患メカニズムの解析、治療戦略考案の過程で実在することが明らかになってきたGPCRの新しい調節機構についてご紹介したいと思います。今後のGPCR関連common diseaseへの展開を期待いたします。

主催教室: 病理学教室(菅間 博教授)

第24回例会 「TAVIの現状と将来」

開催日時:	平成29年2月22日(水) 18:00~19:00
開催場所:	大学院講堂
講 師:	澤 芳樹 氏 大阪大学医学部長、心臓血管外科主任教授
講演内容:	循環器治療の前線である”TAVI: 経カテーテル的大動脈弁留置術”に関する現状と将来に関する講演。 2017年に杏林大学病院での導入を検討しており、準備の一環としてハートチームのみならず、病院職員全体に広く啓蒙を促す目的です。
主催教室:	心臓血管外科学教室(窪田 博教授)
第23回例会 「白内障手術と周術期管理のサイエンス」	
開催日時:	平成28年10月5日(水) 19:00~0:00
開催場所:	杏林大学医学部 臨床講堂
講 師:	三宅 謙作 氏 眼科三宅病院 理事長
講演内容:	講演者の三宅先生は日本の白内障手術の第一人者であり、動物実験を含め数多くの研究成果を発表されている。講演では血液房水柵破綻と類嚢胞黄斑浮腫、角膜上皮障害など白内障手術時の合併症の成因とその対策について講演される予定である。
主催教室:	眼科学教室(平形 明人教授)
第22回例会 「タンパク質メチル化異常とヒト発がん Critical role of protein methylation in human tumorigenesis」	
開催日時:	平成28年7月13日(水) 18:30~19:30
開催場所:	臨床講堂(第2病棟4階)
講 師:	浜本 隆二 氏 国立がん研究センター研究所 がん分子修飾制御学分野 分野長 東京医科歯科大学NCC腫瘍医科学分野連携教授
講演内容:	近年エピジェネティクスの異常がヒト発がん重要な役割を果たしていることは広く知られており、ヒストンメチル化はエピジェネティクス制御の中心的役割を担っていることが報告されている。我々は2004年にヒストンメチル化酵素SMYD3の異常がヒトがん化に関与していることを世界に先駆けて報告し、その後もヒトがん化に関与している複数のヒストンメチル化酵素および脱メチル化酵素を同定してきた。また、近年ヒストンタンパク質のみならず、ノンヒストンタンパク質メチル化異常もヒトがん化に関与していることを報告している。本セミナーでは、タンパク質メチル化異常の発がんにおける重要性、およびタンパク質メチル化を標的とした治療法の臨床応用への可能性に関して発表する。 Reference) Hamamoto et al., Nature Reviews Cancer, 15, 110-124 (2015)
主催教室:	大学院医学研究科教務委員会(腫瘍内科学)
第21回例会 「1)in vivoに近い糸球体上皮細胞の培養法」 「2)EMARS (Enzyme-mediated activation of radical sources)法によるタンパク質複合体解析:糸球体上皮細胞間接着装置を構成するタンパク質群の同定」	
開催日時:	平成28年4月1日(金) 13:00~14:00
開催場所:	基礎棟3階会議室

講 師： 矢尾板 永信 氏、吉田 豊 氏
新潟大学医歯学総合研究科腎研究施設構造病理学分野

講演内容： 1) 培養系球体上皮細胞の形態・遺伝子発現はin vivoの細胞と明らかに異なり、研究を行う上での支障となっている。本講演では、in vivoに近い形質を示す培養条件を紹介し、系球体上皮細胞の形質に影響を与える条件を考えてみたい。
2) EMARS法は、細胞膜上に存在する生体機能分子の「会合」現象とその結果生じる機能分子の集合体の役割を解明するための方法である。本法により、従来は不可能であった、生細胞において任意の細胞膜上分子が含まれるマイクロドメイン上に属する分子を網羅的に標識することが可能になる。本講演では、EMARS法を用いて、腎系球体における濾過障壁の主役であるスリット膜近傍の未知の分子を探索した研究成果を紹介する。

主催教室： 小児科学教室(楊 國昌教授)

第20回例会 「Malaria in pregnancy.」

開催日時： 平成28年4月1日(金) 16:00～17:00(質疑応答含)

開催場所： 基礎棟3階会議室

講 師： Prof. Alka Sehgal,
Dept. of Obstetrics and Gynaecology,
Government Medical College and Hospital, Chandigarh, India

講演内容： インド・パンジャブ地方の中樞医療機関の1つである政府医科大学・チャンディガルのAlka Sehgal教授(産婦人科)に、妊婦におけるマラリア重症化の実態についてお話を伺う。妊婦におけるマラリアの重症化はこれまで熱帯熱マラリアで報告されていたが、教授は、最近、妊婦が三日熱マラリアに感染して重症化する症例を数多く見出し、本講演で紹介する。

主催教室： 医学部感染症学教室(寄生虫学部門)(小林 富美恵教授)

第19回例会 「メチローム多様化によるバクテリアの進化とその生物工学的応用」

開催日時： 平成28年4月5日 16:00～17:00

開催場所： 基礎棟3階会議室

講 師： 古田 芳一 氏
マサチューセッツ工科大学、米国

講演内容： ゲノム中のDNAメチル化は多くの生物で観察されるDNA修飾であり、遺伝子発現制御や細胞発生における役割がわかってきている。バクテリアでは、種や株によってこの修飾を施すDNAメチル化酵素遺伝子の数、そしてそのターゲット配列も多様であり、真核生物よりも多様性が高いと言える。本講演では、まず種内でゲノム中のDNAメチル化状態(メチローム)の多様化を観察した例として、ピロリ菌(*Helicobacter pylori*)のメチローム比較解析について紹介する。さらに、このメチローム多様化のメカニズムを応用して「メチロームライブラリー」を構築し、生物工学分野に応用する研究について紹介する。

主催教室： 感染症学講座・微生物(神谷 茂教授)